



## 面接と立場

宮岡 等

うつ病で会社を休んでいる患者さんから「今度、産業医の面談があります。クビにならないために何かに注意して話せばいいですか」と聞かれたことがある。職場の産業医から、さも当然のごとくあるかのように、病状を聞きたいと直接電話をもらったこともある。

産業医は、直接患者の診断や治療に当たる主治医よりも企業の人事担当者に近い距離にあり、患者に対する立場が主治医とは異なる。患者が職場の産業医にどこまで話せばよいかと悩むことはよくあるし、産業医も安全への配慮を考えつつ患者から得た情報の流れには慎重であることが求められる。一方、主治医は患者の勤務先やその産業医に何らかの情報を伝える場合、患者の同意を得る必要がある。しかし、同意を得にくいが伝えたほうがよい情報をどう扱うべきかに、主治医自身が悩むことも少なくない。このあたりの手順が適切でなければ、産業医対従業員、および主治医対患者の関係は成り立たない。複雑なのは主治医に近い立場にいるはずの職場の医務室の医師が産業医を兼ねている場合で、外部の病院で治療に当たる主治医はその医師の立場の理解にとまどうし、その医師自身がいずれからの立場をわかっていないかのようにみえることすらある。

学校でもしばしば似たような場面に出会う。学校カウンセラーの前では一言も発せず、統合失調症を疑われた学生が、病院の医師の前では普通にしゃべったというケースもあるし、学校の先生が「学校カウンセラーや主治医が情報をくれない」と嘆く場面にもしばしば出会う。大学に所属する精神科医である筆者は、教員、校医、主治医という三つの立場で学生にかかわる可能性があり、その場における自分の立場を学生に対して明確にしなければ面接は成り立たない。面接者の立場が曖昧では適切な情報が得られないばかりか、誤った理解につながるという当然の知識をつねに確認しておきたいと思う。